

氏 名	ふく たに しげる 福 谷 茂
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 385 号
学位授与の日付	平 成 12 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	カント哲学研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 蘭 田 坦	教 授 伊 藤 邦 武	教 授 藤 田 正 勝
--------	--------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、いわゆる批判哲学と称されるカントの独自の哲学体系を、その形而上学のおよび存在論的な根本構造ないし根本体制にまで遡って考察し、それを通じてカント哲学の全体像を俯瞰するための新たな視座を確立せんと試みたものである。論者はここで、論者自身がとくに重要とみなすカントのいくつかの主要概念と個別的問題を取り上げ、それらの解明と批判的検討を積み重ねることによって、全体として論者がカント理論哲学の核心と見定めるものを浮き彫りにするという一貫した手法と目的をもって考察を進める。とりわけその枢軸となるのは、カントにおける理性と、その理性にとっての世界としての「一なる可能的経験」の問題であり、論者はこれらを新たなカント解釈上の鍵概念として樹立し、またこれら両概念の間に拓かれ、張り渡される関係の上に立脚しつつ、新たなカント解釈を提示せんとしている。八章に亘り順次取り上げられる問題は相互に緊密に関連するが、あえて大別すれば、第一章から第四章までは、カント的理性の本質と意義をその独自の動的性格に注目しつつ究明した部分であり、続く第五章から第八章は、この理性の自己超出によって開かれる高次な客観性の構成を論じた部分であると言える。概要は以下の通りである。

第一章「物自体と『純粋理性批判』の方法」では、従来のカント解釈上でも最も難題とされてきた物自体の概念を取り上げ、実際のテキスト状況に密着した実証的な検討がなされる。論者によれば、この概念は決して固定的実体的な存在を指すのではなく、むしろ『純粋理性批判』の論述の進行とともに物自体の意味はいわば関数的に変化していると見られる。より具体的には、物自体は感性論から分析論・弁証論へと解明が進むにつれて、いわば一步步後退していくことが論証されとともに、逆にこのような物自体概念の意味の展開を道標として、この書物全体の理論的内容とその最終的な狙いが明確化されていく。そしてこのような物自体概念の多義性の厳密な整序によって、物自体の後退と反比例して現われてくるのが、全面的な現象化の場所としての「一なる可能的経験」(eine mögliche Erfahrung)という概念であるとされる。この概念は従来ほとんど看過されてきたが、論者はこれを『純粋理性批判』の最も重要な理論的成果として強調し、物自体と対極をなすこの概念の観点からカント哲学の全体像を構築しうる可能性があることを示唆する。またこのような理解によって、『純粋理性批判』における哲学的探求と叙述の方法論を、ルネサンスおよび近世初頭より学問一般の方法論として議論されてきた分析＝総合というパラダイムに関連づけて解釈する新たな展望が開かれるとともに、従来対処の困難と見られた多くの問題点をも明快に読解することができるようになることが指摘される。

第二章「理性と超越論的観念性」では、さらに物自体の概念に焦点を合わせつつ、先にその実体性を奪われ関数化されたこの概念の正体として、カント的「理性」の概念が主題的に考察される。その際、物自体と理性とを媒介するものとして無限判断が目され、従来の無限判断についての理解の不十分性が訂正される。すなわち無限判断の独立は、いわゆる汎通の規定性の排除という点でアンチノミーの解決手段としての役割を準備しているのであり、従ってそれ自体がすでに、悟性ではなく理性の事柄として考えられねばならず、また『純粋理性批判』はすでにその前半部から主体としての理性の登場を予告しているとみなされ、さらにまた理性は物自体と現象という二元性からなる超越論的観念性そのものの担い手として考えられねばならないことが論じられる。そしてそれらは、理論理性と実践理性の一体性という問題の解明にも独自のルートを開き、ひいては『判断力批判』における「超感性的基体」に対してもこれをカント哲学の有機的連関へと組み込むための基

礎となることが示唆されている。

次に第三章「存在論としての「先天的綜合判断」」においては、「先天的綜合判断はいかにして可能か」というカント自身による周知の定式化を取り上げ、しかもこの定式化がなされる、いわばその背後に回って、カント哲学が抱懐する存在論をテキストから直ちに再構成するという作業が試みられる。ここから先に見た「一なる可能的経験」がそれ自体一つの存在論であって、カントに先立つ 17, 18 世紀ドイツの講壇的形而上学の存在論の核心である「汎通的規定」と正面から対決することをその目的としていたことが明らかにされる。さらにまた「一なる可能的経験」は、単に超越論的理想においてだけでなく、広く超越論的弁証論の全体を包括しうる概念であることが指摘される。これによって、真理の論理学である超越論的分析論と、仮象の提示と批判を行う超越論的弁証論とが、それぞれ「一なる可能的経験」と「汎通的規定」という二つの異なる存在論によって象徴され、『純粹理性批判』全体の体系的構造がきわめて明瞭に把握されることになる。さらにこの「一なる可能的経験」は、新しい規定の創造を可能とするという点に「汎通的規定」との最も際立った対比をなすことが論定され、のちのカントの中心的主題となる自由と美と目的論の基礎がすでにこの概念のうちに据えられていることが確認される。

さらに第四章「カントの可能性概念」では、以上の論点を踏まえ、形而上学ないし存在論としてのカント哲学の確立にとって、いわば扇の要の位置にあることが今や明らかな「一なる可能的経験」の、この可能性概念そのものに焦点が合わせられ、その構造が論究される。ここではまず可能性様相が、カントに先立つヴォルフやバウムガルテンの形而上学では完全に見失われ、実質的には無様相的な存在論に陥っていたことが、ヴォルフの「可能性の補完」という概念の検討を通じて論証される。さらにバウムガルテンにおいても、この概念は前述の汎通的規定のうちに解消されており、この意味でカントが可能性概念に託した役割は、まさに汎通的規定の存在論に代わる存在論であったことが指摘される。カントはこのような無様相的な存在論の打破を、すでに 1760 年代から主要課題としていたのであり、有名な「存在は述語ではない」という命題もまたこの文脈で始めて本来の批判力を発揮することが示される。さらにまた『純粹理性批判』の原則論における可能性・現実性・必然性の三様相についても詳しい検討がなされ、ここに言う三様相の一つとしての可能性と、「一なる可能的経験」の可能性とはレベルを異にするものであって、後者が三様相全体の基礎という位置に立つことを論定し、かくして従来のカント解釈における混同を正して、カントにおける可能性を経験の根源的様相として明示している。

以上の諸章は、先にも述べたごとく、カント的理性そのものがもついわば自己超越的ダイナミズムを物自体の諸相と可能性概念を梃子にして究明したものとすれば、以下の諸章は、カント的理性の次なる段階としての理性の自己超出性、すなわち理性が自己の相対化を通じて高次の客観性を構成していく、その能力と発現のあり方が論究の中心となる。

まず第五章「カントにおける自然学と形而上学」では、先の「一なる可能的経験」というカント固有の経験概念が、狭義の認識論や存在論以外の場面にもその適用をもつことを論じるため、この概念のさらに広い近世思想史的文脈からの由来を明らかにし、またカントにおける自然学、とりわけ力学の基礎づけの問題が取り上げられる。すなわちここでは、近世の自然学の生誕をコペルニクスから辿ることを通して、その基本的な方向性が位階秩序の崩壊と均質性の台頭、脱中心化、対称性の世界原理化という点において同定されることを確認するとともに、またとくにこの対称性の登場と全面的な対称化を推進する能力としての理性がクローズアップされ、その理性の自己相対化の遂行を通じて、主観性を脱却した対称性＝均質性としての認識が実現されたことを論証している。このようにして、カントの経験概念が対称化を核心とする近世的自然学の要請に応えるものであることを、カントの空間論の諸展開を辿ることによって跡づけ、さらにのちの『自然学の形而上学原理』における現象学の方法を、コペルニクス以来の近世自然学の哲学的到達点として評価できることを示唆している。

次に第六章「カント哲学における「経験」概念について」では、上述のような対称性の見地と、それが要求する理性の動的本性が、いま一度「一なる可能的経験」のレベルに立ち戻って確認される。ここではとくにカントがその空間論に関連してしばしば言及した「不一致対称物」という特殊な問題を取り上げて詳しく検討し、そこからこの事象の内的構造の論理に従っても「一なる可能的経験」が導き出されることが示される。カントがこの問題を繰り返し論じたのは、まさにこの事象において、われわれの経験そのものが単に感性和悟性だけではなく、さらに理性の関与を得て初めて成立することを明白に示すからであると解釈される。しかもここでの理性とは、自己相対化によってあらわになる対称性を客観性の指標とみなす、その認識の主体に他ならず、またこの対称性の成立する場所が「一なる可能的経験」に他ならないことが確認されるのである。

さらに第七章では、『純粋理性批判』における歴史の問題が論ぜられる。歴史の概念は、従来のカント解釈においてはいわば周辺的な位置に置かれてきたが、論者によれば、カントにおける歴史の問題はすでに『純粋理性批判』の核心とも言うべきところに食い入り、超越論的観念論はある意味では歴史の基礎づけとさえ見られるとされる。その一例として、『純粋理性批判』においてコペルニクスに結びつけて語られる「思考法の革命」という事態を取り上げる。論者はこの「思考法の革命」を、先に見たように現象性そのものの根底に対称化能力としての理性を見出すこととして捉え、さらにこれをアンチノミーの解決における理性の自己超越における自己形成として理解するならば、それによって理性はいわば公共的な場所に出て、他の諸理性と共有的な場所をもつことになり、このような公共性の誕生こそが歴史がそこに始まる基礎であるとみなす。論者によれば、通常カントの歴史哲学の書とみなされる「世界公民的見地における一般史考」も、理論的に『純粋理性批判』の帰結として後続することが説得的に理解され、また超越論的観念論が本来共同性の理論であるという主張の一端として、歴史がカント哲学の中枢に属することが証示されることになる。

最後に第八章「批判哲学としての永遠平和論」においては、前章において到達された理性的存在の共存の問題が永遠平和論を材料として検討される。ここではカントの考える諸国家間の関係のあるべき姿も、論者の言う意味での理性が構成的に関わった世界のあり方として考察され、カントが批判哲学そのものの使命を理性による公共化の要求として確定し、理性的世界のあり方をより具体的に構想していたことが解明されている。

以上のような解明と検討を積み重ねることによって、カント的理性の新たな理解と強調を軸としたカント哲学の全体像構築への立脚点が浮き彫りにされ、さらにはその核心的な事態と個別的な諸問題が、等しく理性を主導的契機として理解されてくると、論者は見ている。

論文審査の結果の要旨

三つの批判書を中心として、いわゆる批判哲学として確立されたカントの壮大な哲学体系は、近世哲学史上に揺るぎない金字塔として聳え立つものであり、それゆえにまたこれに対して、従来からも実に多くの研究や解釈が繰り返されてきたことは周知の通りである。本論文もまたこのようなカント哲学に対して、主として『純粋理性批判』に展開される理論哲学を、その形而上学のおよび存在論的な根本構造ないし根本体制にまで立ち返って解明・把握し、それらを通じて従来の諸解釈に批判的な一石を投ずるとともに、改めてカント哲学の全体像を構築するための新たな視座を見出さんとする試みである。論者はここで、論者自身がとくに重要とみなすカントのいくつかの主要概念と個別的問題を取り出し、それらの解明と批判的検討を積み重ねることによって、それらから全体として論者がカント理論哲学の核心と見定めるものを浮き彫りにするという一貫した手法をもって考察を進めている。

本論文で主題的に取り上げられるのは、物自体、方法、無限判断、可能性概念、汎通的規定、経験概念、対称性、コペルニクスの転回、歴史、永遠平和などの概念や問題であるが、論者にとってそれらの考察を導く基底に置かれ、それらを一貫して貫くいわば枢軸とみなされるのは、とりわけカントの「理性」概念と、またその理性にとっての世界としての「一なる可能的経験」という問題である。カントの「理性」と「一なる可能的経験」とは、論者によれば同一事態の両面とさえみなされ、両概念は相互に相手を解明し合う関係において見られ得るものとなる。かくして論者は、これら両概念の間に拓かれ、張り渡される関係の上に立脚しつつ、新たなカント解釈を提示せんとするのである。全八章を通じて見られる詳細にして精緻な論究と、随所に鋭い知見と洞察を示した考察は、以下のような特徴と独創的な成果をもたらしている。

1) 本論文の重要な特徴は、何よりもまずカントにおける「理性」の概念を根幹に据え、その独自かつ柔軟な理解を提示したことに見られる。論者はここで、カント的理性が従来の解釈では見過ごされてきたきわめて主体的な実質をもつと考え、『純粋理性批判』の全体を導く、いわばその論述の主体として機能しているとみなす。このように『純粋理性批判』全体の高次な主体としての理性の理解を示したところに、本論文の最大の特徴があり、これによって従来のややもすれば形骸化し常套句化した「カント哲学と理性の一体化」を見直す新たなカント解釈の地平が拓かれている。

2) このような理性の理解に関連して、そこからさらに「一なる可能的経験」という概念が著しく重視されてくる。この概念もまた従来ほとんど看過されてきたものであるが、論者によれば、それはカントにおける経験あるいは世界の究極的な把握を示す概念として、カント哲学の核心に位置づけられるべきものとみなされる。この「一なる可能的経験」という重要な概念のもつ意義に注目し、これを論述全体の基盤として、カント哲学の全体像を俯瞰するための新たな視座として提示し

たことは、論者のきわめて独創的な着想であり、今後のカント研究に寄与するところははなはだ大きいと思われる。

3) 従来のカント解釈上でも最も難題とされてきた「物自体」の概念に関しても、論者はまた独自の解釈を示している。これまでの解釈は、物自体という表現が何らかの一貫した対象を指すとみなす点ではば軌を一にするのに対し、論者によれば、物自体は決してそのような固定的実体的な存在を指すのではなく、むしろ『純粹理性批判』の論述の進行とともにいわば関数的にその意味を変化するものと把握される。このような動的な理解も、実は上述のような理性理解に基づいて始めて可能となっているのであって、そこに論者の鋭い洞察と柔軟な思考を窺うことができる。

4) このようなカントの独自の理解を導き出すに際して、カントに先立つ 17, 18 世紀のドイツ哲学、とくにライプニッツ、ヴォルフ、バウムガルテンらの形而上学思想についての綿密な考察を踏まえ、それらへの対決・批判を通じてのカント哲学の成立と意義を論じた点も本論文の大きな成果である。とりわけそれら先行形而上学の存在論の核心である「汎通的規定」との正面からの対決を通じて、上述の「一なる可能的経験」自体が、それに代わる一つの存在論として成立するという指摘は、きわめて興味深い。

5) カントにおける自然学、不一致対称物、歴史観、永遠平和論などの問題が、カント的理性の自己超えないし自己相対化によって構成される高次の客観性として、理性との連関において、いわば超越論的観念論の枠内に属する事柄として取り上げられ、説明されている点もまた、本論文の重要な成果であると言える。

以上要するに、本論文は、カントにおける「理性」と「一なる可能的経験」の両概念を枢軸として、『純粹理性批判』の中心思想をのみならず、それを準備する 1760 年代以降のカントの思想的発展と形成、さらにそれ以後の第二、第三の批判書へと繋がる展開と脈絡をも併せて眺望しつつ、カント哲学の全体像の構築のための新たな視座を提示せんとした独自の試みであり、わが国における今後のカント研究に大きな示唆と刺激を与えるものとして高く評価されよう。

本論文における議論は、しばしば原理的・本質的な問題に立ち入り、その論証も微妙かつ犀利な論点にまで及ぶため、時として論述がやや難解で錯綜した感を残す点は、難と言えば難であろう。また本論文中的ある部分は、かなり以前に書かれたものであるため、その成果に関連するそれ以後の文献や、最近の研究動向に関する論究が十分に取り入れられていないのが惜しまれる。とは言え、これらは本論文の優れた成果と独創性を大きく損なうものではなく、むしろ今後に残された課題としてその改善を期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成 12 年 1 月 14 日、調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。